

正法眼藏現成公案

二四

諸法の佛法なる時節、すなはち迷悟あり、修行あり、生あり死あり、諸佛あり、衆生あり。萬法とも
にわれにあらざる時節、まどひなく、さとりなく、諸佛なく、衆生なく、生なく滅なし。佛道もとよ
り豊儉より跳出せるゆゑに、生滅あり、迷悟あり、生佛あり。しかもかくのごとくなりといへども、
華は愛惜にちり、艸は棄嫌におふるのみなり。自己をはこびて萬法を修證するを迷とす、萬法すすみ
て自己を修證するはさとりなり。迷を大悟するは諸佛なり、悟に大迷なるは衆生なり。さらに悟上に
得悟する漢あり、迷中又迷の漢あり。諸佛のまさしく諸佛なるときは、自己は諸佛なりと覺知するこ
とをもちゐず、しかあれども證佛なり、佛を證してもゆく。身心を擧して色を見取し、身心を擧して
聲を聽取するに、したしく會取すれどもかみにかげをやどすがごとくにあらず、水と月のごとく
にあらず、一方を證するときは一方はくらし。佛道をならふといふは、自己をならふなり、自己をな
らふといふは、自己をわするるなり、自己をわするるといふは、萬法に證せらるるなり。萬法に證せ
らるるといふは、自己の身心、および他己の身心をして脱落せしむるなり。悟迹の休歇なるあり、休
歇なる悟迹を長長出ならしむ。人はじめて法をもとむるとき、はるかに法の邊際を離却せり、法すて

におのれに正傳するとき、すみやかに本分人なり。人舟にのりてゆくに、目をめぐらしてきしをみれ
ば、きしのうつるとあやまる。めをしたしくふねにつくれば、ふねのすすむをしるがごとく、身心を
亂想して、萬法を辨寫するには、自心自性は常住なるかとあやまる。もし行李をしたしくして、簡裏
に歸すれば、萬法のわれにあらぬ道理あきらけし。たきぎははいとなる、さらにかへりてたきぎとな
るべきにあらず。しかあるを灰はのち薪はさきと見取すべからず、しるべし薪は薪の法位に住して、
さきありのちあり、前後ありといへども、前後際斷せり。灰は灰の法位にありて、後あり先あり、かの
薪はいとなりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのちさらに生とならず、しかある
を生に死になるといはざるは、佛法のさだまれるならひなり、このゆゑに不生といふ。死の生になら
ざる、法輪のさだまれる佛轉なり、このゆゑに不滅といふ。生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐ
なり、たとへば冬と春のごとし。冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり。人の悟を
うる、水に月のやどるのごとし。月ぬれず、水やぶれず、ひろくおほきなる光にてあれど、尺寸の水に
やどり、全月も彌天もくさの露にもやどり、一滴の水にもやどる。悟の人をやぶらざること、月の水
をうがたざるがごとし。人の悟を罣礙せざること、滴露の天月を罣礙せざることし、ふかきことはた
かき分量なるべし。時節の長短は、大水小水を檢點し、天月の廣狹を辨取すべし。身心に法いまだ參

一本のねれ
すの字あり
も字あり
水の下に
亦も字あり

飽せざるには、法すでにたれりとおぼゆ。法もし身心に充足すれば、ひとかたはたらずとおぼゆるなり。たとへば船にのりて山なき海中にいでて、四方をみるに、ただまろにのみみゆ、さらにことなる相みゆることなし。しかあれどこの大海、まろなるにあらず方なるにあらず、のこれる海徳、つくすべからざるなり。宮殿のごとし、瓔珞のごとし、ただわがまなこのおよぶところ、しばらくまろにみゆるのみなり。かれがごとく、萬法もまたしかあり。「塵中格外、おほく様子を帯せりといへども、參學眼力のおよぶばかりを見取會取するなり。萬法の家風をきかんには、方圓とみゆるよりほかに、このりの海徳山徳おほくきはまりなく、よもの世界あることをしるべし。かたはらのみかくのごとくあるにあらず、直下も一滴もしかあるとしるべし。魚の水を行に、ゆけども水のきはなく、鳥そらをとぶにとぶといへどもそらのきはなし。しかあれども鳥魚いまだむかしよりみづそらははなれず。ただ用大のときは使大なり。要小のときは使小なり、かくのごとくして頭頭に邊際をつくさずといふことなく、處處に蹈翻せずといふことなしといへども、鳥もしそらをいづれば、たちまちに死す。魚もし水をいづれば、たちまちに死す。以水爲命しりぬべし、以空爲命しりぬべし。以鳥爲命あり、以魚爲命あり、以命爲鳥なるべし、以命爲魚なるべし。このほかさらに進歩あるべし。修證あり、その證者命者あることかくのごとし。しかあるを水をきはめそらをきはめてのち、水そらをゆかんと擬する鳥

要一本は
用に作る

魚あらんば、水にもさらにも、みちをうべからず、ところをうべからず。このところをうれば、この行李したがひて現成公案す。このみちをうれば、この行李したがひて現成公案なり。このみち、このところ、大にあらず小にあらず、自にあらず佗にあらず、さきよりあるにあらず、いま現するにあらずるがゆゑに、かくのごとくあるなり。しかあるがごとく人もし佛道を修證するに、得一法通一法なり、遇一行修一行なり、これにところあり、みち通達せるによりて、しらるるきはのしるからざるは、このしるることの佛法の究盡と同生し同參するゆゑにしかあるなり。得處かならず自己の知見となりて覺知にしられんすとならふことなかれ。證究すみやかに現成すといへども、密有かならずしも見成にあらず、見成これ何必なり。麻谷山寶徹禪師、あふぎをつかふ。ちなみに俯きたりてとふ、風性常住無處不周なり。なにをもてかさらに和尚あふぎをつかふ。師いはく、なんぢただ風性常住をしれりとも、いまだところとしていたらずといふことなき道理をしらすと、僧いはく、いかならんかこれ無處不周底の道理、ときに師あふぎをつかふのみなり。僧禮拜す、佛法の證驗、正傳の活路、それかくのごとし。常住なればあふぎをつかふべからず、つかはぬおりも風をきくべきといふは、常住をもしらず、風性をもしらぬなり。風性は常住なるがゆゑに、佛家の風は大地の黄金なるを現成せしめ、長河の酥酪を參熟せり。

正法眼藏現成公案

これは天福元年中秋のころ、かきて鎮西の俗弟子楊光秀にあたふ。

一本建長
し等六字無

●●●●●●
●●●●●●
●●●●●●
●●●●●●
●●●●●●
●●●●●●
●●●●●●
●●●●●●
●●●●●●
●●●●●●

正法眼藏一顆明珠

福本沙の
下に山字
無し
福本ため
の下にに
あり

娑婆世界大宋國福州玄沙山院宗一大師、法諱師備、俗姓者謝なり。在家のそのかみ釣魚を愛し、舟を南臺江にうかべて、もろもろのつり人にならひけり。不釣自上の金鱗を不待にもありけん。唐の感通のはじめたちまちに出塵をねがふ。舟をすてて山にいる、そのとし三十歳になりけり。浮世のあやうきをさと、佛道の高貴をしりぬ。つひに雪峰山にのぼりて、眞覺大師に参じて、晝夜に辨道す。あるときあまねく諸方を参徹せんため、囊をたづさへて出嶺するちなみに、脚指を石に築著して、流血し痛楚するに、忽然として猛省していはく、是身非有、痛自何來、すなはち雪峰にかへる。雪峰とふ那箇是備頭陀。玄沙いはく、終不敢誑於人。このことばを、雪峰ことに愛していはく、たれかこのことばをもたざらん、たれかこのことばを道得せん。雪峰さらにとふ、備頭陀なんぞ徧参せざる。師いはく、達磨不來東土、二祖不往西天といふに、雪峰ことにほめき。ひごろはつりする人にてあれば、もろもろの經書ゆめにもかつていまだみざりけれども、ころざしのあさからぬをさきとすれば、かたへにこゆる志氣あらはれけり。雪峰も衆のなかにすぐれたりとおもひて、門下の角立なりとほめき。衣は布をもちひひとつをかへざりければ、ももつづりにつづれりけり。はだへには紙衣をもちひけり、

福本天の
下にとい
ふ無しの
字無しの
四

正法眼藏一顆明珠